

# 見るvs聞く

～非言語要素がプレゼンテーションに与える効果～

班員 工藤 理沙 蛸原李音

指導者 森脇達哉先生 五反智大先生

磯端 日奈子 戸高野ノ葉

コーチ 上ノ原一道様

4 質の高い教育を  
みんなに



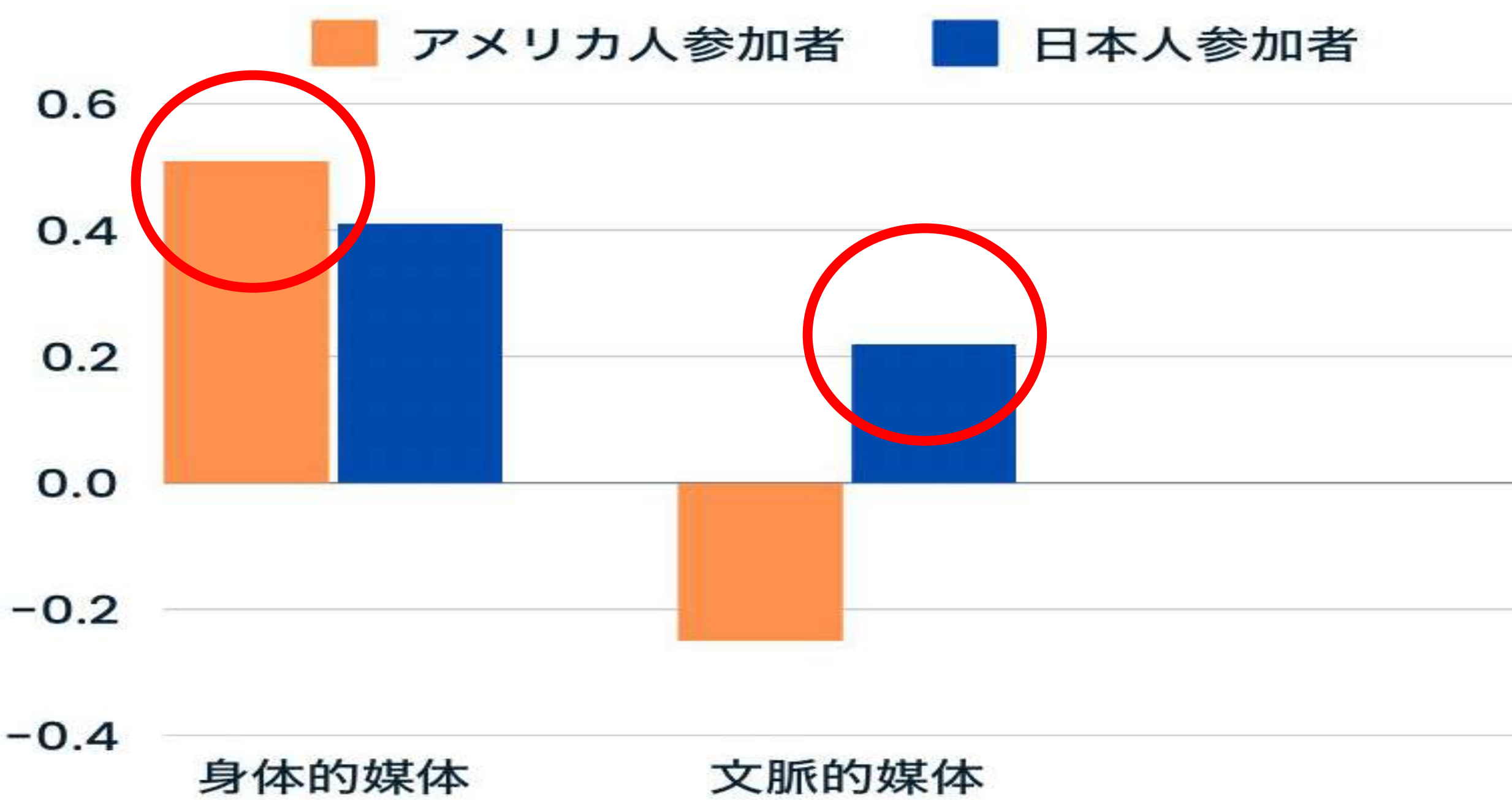
## 研究の動機

グローバル化により、非言語的媒体を用いたプレゼンテーションの推奨をよく耳にするようになったが、プレゼンテーションにおける非言語的媒体の効果を明確にしたいと思ったから。

## 研究の目的

プレゼンテーション能力を向上させたい。

## 先行研究



「京都大学こころの未来研究センター」  
～察するコミュニケーションと表すコミュニケーション～より筆者作成

## 研究方法

- ①1分間の自己紹介動画のa:音声のみの視聴と、b:映像と音声両方の視聴を行う。
- ②動画の視聴後、動画に関する内容の問題5問解いてもらう。
- ③aとbの正解率を出して、どちらの方が正解率が高かったのかをグラフ・表にまとめる。

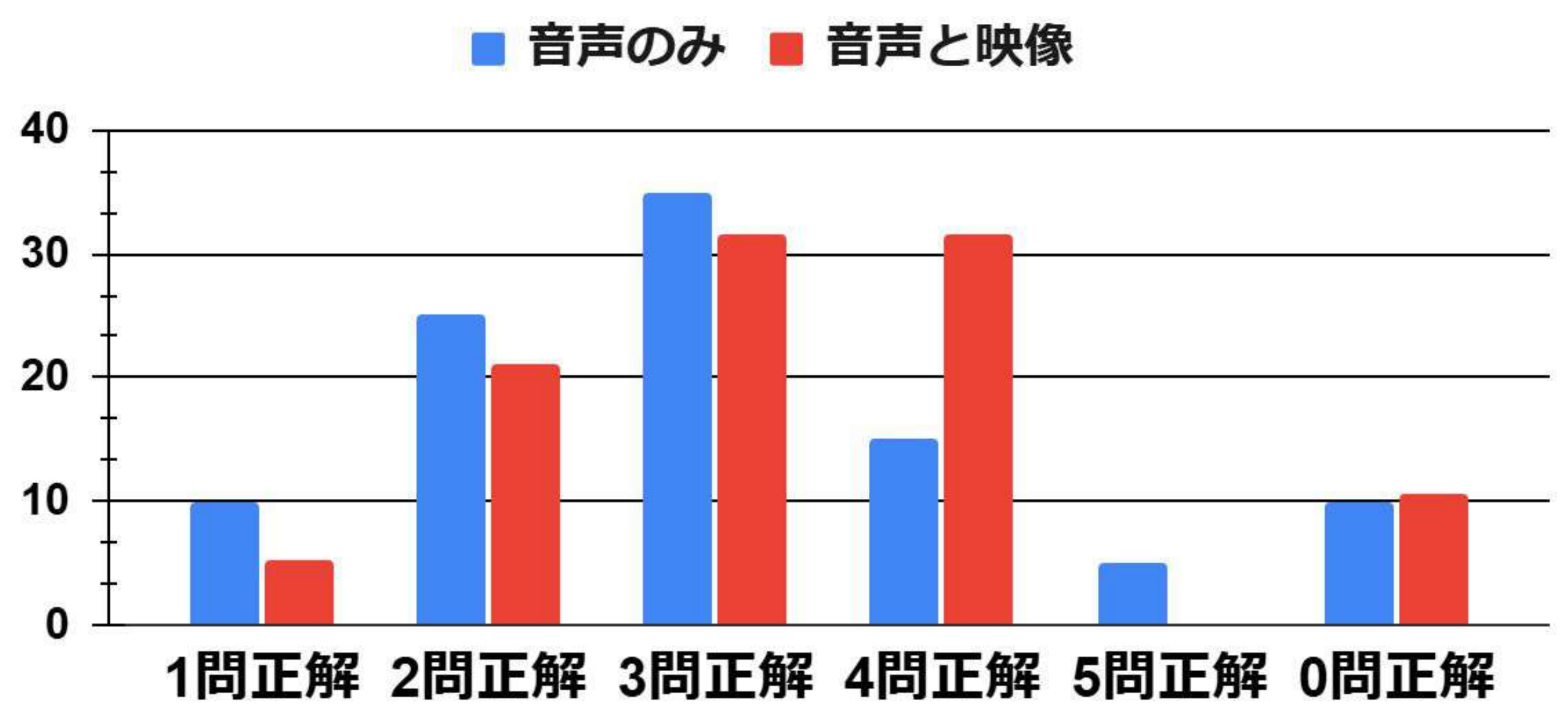
\* 今回の生徒の選出方法は特に決まりがあるわけではなく、同じ学年の男女40人をランダム選出した。

## 仮説

・日本人は先行研究により文脈的媒体を用いたコミュニケーション力が高いことが分かっているため、映像と音声両方の視聴より音声のみの視聴のほうが正解率が高いのではないだろうか。

## 結果

音声のみ と 音声と映像についてのグラフ



正解率(%)

正解率(%)	1問正解	2問正解	3問正解	4問正解	5問正解	全問不正解
音声のみ	10	25	35	15	5	10
音声と映像のみ	5.3	21.1	31.6	31.6	0	10.5

実験の結果より、全体的な割合でみると、**音声と映像のみの動画の視聴**の方が均差ではあるが**正解率が高かった**。しかし、部分的にみても、正解数によってあまり変化がなかったり、**全問正解しているのは音声のみ**だったり、**一概にも映像があった方が動画の理解力が高まったとは言えない**。ただし、今回の被験者の選出方法によっては、能力の偏りが生じてしまったかもしれないため、今後はそのような点についても配慮していきたい。

## 参考文献

宮本百合.“察するコミュニケーションと表すコミュニケーション”. 京都大学. 2013.

[http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokoronomirai/kokoro\\_vol.10\\_57.pdf](http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokoronomirai/kokoro_vol.10_57.pdf)(参照2024-1-12).

## 考察

映像と音声の両方の視聴が音声のみの視聴よりも正答率が高い結果となったのは予想通りであったが、その差はわずかであった。この結果を導いた要因として、日本で生活する私達は、アメリカで生活する人々に比べ**普段の会話で非言語的媒体を使う機会が少ない**。そのため会話中の場の空気や会話の流れに頼るような**文脈的理解力が優れていることが挙げられる**。このことから、日本における対面のプレゼンテーションでは文脈的媒体の影響が大きく、非言語的媒体が効果的であるとは一概に言えないであろう。